千葉県日独協会通信　No.28　－2003年（平成15年）6月25日

Die Eiche

ディ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba
事務局　〒274-0822 船橋市飯山満町2-681 ワールドナーシングホーム内
Phone: 047-467-6111　Fax: 047-467-6123

２００３年 年次総会開催

講演する柴田先生

柴田先生を囲んで．右に平尾会長
左に小野寺顧問、花井顧問、国枝副会長

平成15年5月17日(土) 2:30～6:00P.M.
フローラ西船　30名

恒例の総会は、5月17日2時30分より西船橋の「フローラ西船」で30名の会員を集めて開催された。西阪事務局長の司会で、日独両国国歌がテープで流され、平尾浩三会長の挨拶の後、鈴木理事を議長に選出して、国枝副会長による平成14年度事業報告、下川会計担当による決算報告。そして金谷専務理事からは、平成15年度の事業計画(案)及び予算案の説明があり、満場一致で承認された。

続いて同専務理事より、昨年デュッセルドルフから帰国して本会に入会された元同地日本クラブ事務総長の橋口昭八氏を理事に選任したい旨提案があり、了承された。その他、出席者から千葉県日独協会の入会案内パンフレットを作ってはとの意見があった。

総会終了後の記念講演は、芥川賞作家でドイツ文学者の柴田翔先生によりゲーテ「ファウスト第一部」のヒロイン―マルガレーテの２つの歌など―と題して、ゲーテの生きた時代背景の説明や、「ファウスト」が完成する迄に33年間を要した事等、興味深い話をして頂き、その後ファウストから７ヶ所を引用して詳細な説明がなされた。

続いて懇親会に移り、会員の吉田千賀子さんは、「柴田先生のお話で、ファウストの中に出てくるグレートヒェンはマルガレーテの愛称である事が良く分かりました」と話された。

ゲーテ「ファウスト第一部」のヒロイン
―マルガレーテの二つの歌など―

柴田　翔

一　ゲーテの生きた時代

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテは一七四九年フランクフルトに生まれた。当時はフランクフルトは神聖ローマ帝国の自由都市で交易の中心地となっていた。彼の生きた時代は王侯貴族の支配する宮廷社会が一七八九年のフランス革命により市民が支配する社会に変わる「社会秩序の移行期」であり、彼は二十五歳の時、十八歳の青年君主カール・アウグストによりワイマールに招かれ、やがて大臣に登用される。十一年間その職を務めた後も宮廷人としてその地で一生を過ごしたのである。

又、小説家という職業がそろそろ公認され始めた頃で「若きウェルテルの悩み」も発表された。

二「ファウスト第一部」

ゲーテが二十四歳であった一七七三年から書き始め、途中フランス革命から始まった大動乱が中休みとなり、一八三一年に完成した。ファウストは十六世紀のいかさま師として実在した人物であるが、ゲーテは彼を自己の可能性を徹底的に追求する者として捉えている。

前半ではファウストが全ての快楽を経験しようとして悪魔メフィストーフェレスと契約を結び、自分の欲望をかなえる為に死後の魂を売り渡して若返る。

後半では、ファウストが少女マルガレーテを誘惑して捨てる。ファウストとの逢瀬の為、眠り薬で母を殺したマルガレーテは、更に嬰児殺しを犯して地下牢に捕らえられ、明日は処刑を待つ身となる。ファウストはメフィストの力を借りて彼女を救出しようとするが、彼女は悪魔の助力による脱獄を拒否し、罪を認めて処刑を受け入れ、自分の魂を神に委ねるという悲劇的物語である。

（後、七箇所を引用して詳細な説明あり。）

～今後の催物案内～

□　**チター演奏会**

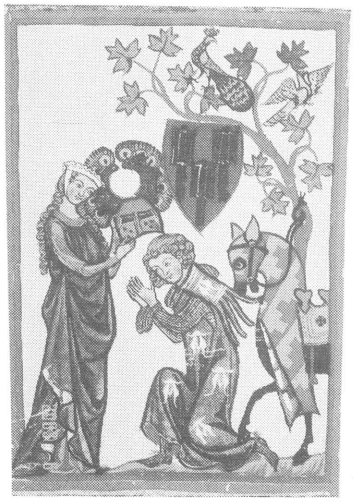
演奏：日本チター協会会長　内藤敏子先生
日時：7月5日(土) 2:00～5:00 P.M.
場所：フローラ西船（TEL 0120－262427）
交通：JR総武線西船橋駅より3分
会費：3000円（懇親会含む）

□　**ライムント・ヴァルナー武官歓送会**

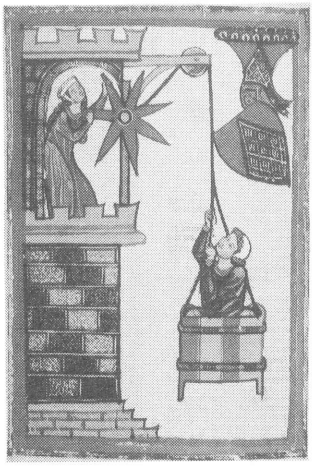
武官は今秋帰国されます。
詳細については後日お知らせ致します。

☆　会費納入のお願い　☆

先日振込用紙をお送り致しましたが、年会費 3,000 円の納入を早目にお願い申し上げます。



『大ハイデルベルク歌謡写本』より（上・下）



「古城の騎士たち・貴婦人たち」

当協会会長　平尾　浩三

5月22日（財）日独協会主催講演（於 上智大学）

「愛、それは十二世紀の発明」、という見方がある。これを念頭に置きながら、西暦 1200 年頃、ドイツ諸宮廷に花開いたミンネザング（恋歌）を、鑑賞しよう.....

これらの詩歌の背景にあるのは、宮廷騎士の務めとされた「愛の奉仕」である。男子たるもの、ひたすらにご婦人を敬愛致すべし。婦人の足下にひざまづいて愛の恵みをお願いし、危険迫らば己の命を顧みず婦人をお守り申すべし.....しかし現実はどうであったのか？.....良き騎士のなすべき「婦人への奉仕」とは、所詮、現実における男性横暴の裏返し、ユートピアに過ぎなかったのか？

かも知れぬ！ だが、遠き中世びとの抱いた夢に思いを馳せることは、今日に生きる我々にとってこそ、まさに意義深いものがあろう。そしてまた、中世ヨーロッパの騎士道の教えと日本武士道の間に存する異同を考察することは、我々に重要な示唆を与えるであろう。

ミンネザングのテーマとなるのは、公認されえない愛、秘すべき恋であった。およそ満たされぬ愛の苦しみこそが若者の心を深め育てるものなること、昔も今も変わるまい。他方、長年連れ添った夫婦愛など、ミンネザングの世界では問題にならない。

しかし中世びとが、夫婦のあり方に無関心であったのではない。叙事詩において、夫婦の問題はしばしば論じられる。例えば『エーレク』の中で主人公エーレクは、妃を溺愛する騎士に対し、正しき夫婦のあり方を諄々と説く：「.....貴殿と貴殿の奥方のごとく、愛し合う同志がひたと寄り添い生きること、これにも増して良きことは、人の世にまたとあるまい。さりながら、去っては戻る男子の暮らしが、婦人がたには喜ばしい。男子が時には傍を離れて、新鮮な存在であり続けるのを、婦人らは望んでいるのじゃわ。して貴殿がた、何ゆえに、お二人の世界に閉じこもられる？ 世の人々と交わるのは、まことによろしきことであるのに.....」

今から800年もの昔に、男女の愛のあり方について、人はかくも繊細微妙な思いを、さまざまに巡らせていたのである。「中世暗黒時代」というレッテルのナンセンスなることは今さら申すまでもなく、他方「十二世紀ルネサンス」といった見方の重い意味を、きょうの講演との関連でも、それぞれに考えていただきたい。

（聴衆約60名）